

江戸城無血開城の立役者の一人、幕臣の勝海舟（1823〜99年）の確認できる画像すべてを集めたという『勝海舟関係写真集』（出版舎 風狂童子）が刊行された。幕末から晩年までの勝の写真とそれぞれの解説のほか、同時代に描かれた肖像などの絵画や、全国各地にある彫像の写真なども網羅した重厚な一冊となっている。

写真集刊行

現存する勝の最古の写真は、万延元年（60年）に米国で撮影された一枚。日米修好通商条約の批准書交換のために派遣された使節団の一員として、刀を持ったりりしい姿が写る。また、死の3年前に自宅の庭で撮られた写真には、白髪、白ひげの着物姿で納まる。

珍しいのは、40歳代の勝が洋服を着てざん切り頭で撮影された一枚だ。縦約9センチ、横約5センチの名刺版で、「鶏卵紙」を用いた古典的な技法でプリントされている。この写真は近年、ネットオークションで見つられ、台紙の裏面の「勝安房守」と「東京浅草 横浜馬車道 内田」の記述から、明治天皇の肖像写真を手が

けた写真師・内田九一の写真館で撮影されたものとわかった。勝が残した『海舟日記』と照らし合わせ、撮影日が判明した。

本写真集の著者の一人で、古写真研究家の森重和雄さんは「勝は何度か内田の写真館を訪れているが、明治4年（71年）の訪問時の写真だけが見つかっていなかった。明治4年の散髪脱刀令発令から2か月後には断髪していたことがわかる」と語る。勝は維新後、明治政府から官職に任じられたが、この撮影の頃には退いていた。同じ写真が、明治初期の高官42人の写真を集めた土産写真に用いられていたこともわかり、その写真も掲載されている。

写真集ではこのほか、無血開城のもう一人の立役者、西郷隆盛の東京・上野公園の銅像に関わる勝の工ピソードや、都内にある勝ゆかりの場所なども紹介。勝の玄孫の文筆家、高山みな子さんが無血開城に至る道筋を解説するなど、勝ファンを楽しませてくれる作りだ。B5判467ページ。8000円（税別）。

勝海舟の画像すべて掲載



明治4年に撮影されたと思われる断髪姿の勝海舟
（三沢敏博さん提供）